

沖縄戦体験 4割PTSD

高齢者400人にリスク調査

基地の被害戦争想起

沖縄戦を体験した高齢者の4割が、深刻な心の傷(トラウマ)を抱え、心的外傷後ストレス障害(PTSD)を発症したり、今後発症する可能性があることが分かった。県内の精神保健にかかわる専門家が沖縄本島や周辺離島を含む8市町村で約400人の高齢者を対象に、沖縄戦が与えた影響について調べた。悲惨な体験に加え、戦後も米軍基地から派生する事件事故、騒音被害などが戦争を思い出させ、戦後68年たっても高齢者の生活を脅かしていることが浮き彫りになった。沖縄戦体験者のトラウマについての大規模調査は初めてという。(宮城栄作) 29面に関連

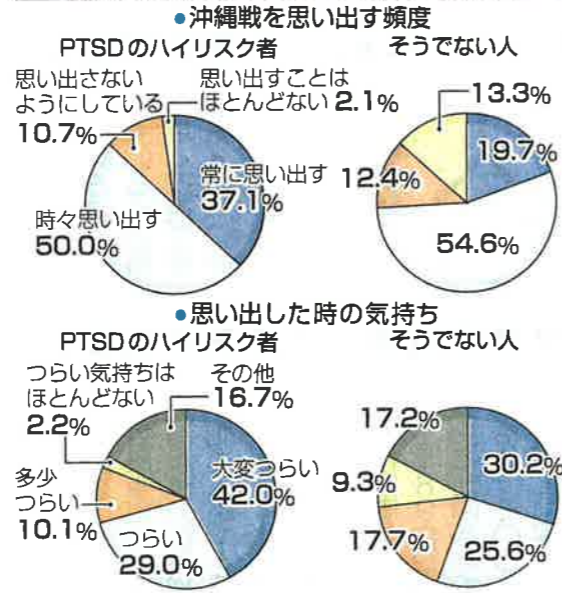
トラウマ初の大規模面接

調査は沖縄戦トラウマ研究会(代表・當山富士子元県立看護大教授)が昨年4月からことごとく2月にかけて、読谷村、八重瀬町、宜野座村などで、デイサービスを利用する75歳以上の高齢者を対象に実施。保健師らが431人を面接して心身の健康状況を調べ、359人の有効回答を得た。平均年齢は82歳だった。

ただどる
つなぐ
戦後68年

は22%(15人)だった。同震災でPTSDと診断された人の点数は平均35点で、今回の沖縄戦体験者の調査では95人(26.5%)が該当した。
當山代表は「戦後67年以上経過しているにもかかわらず、阪神淡路の平均点を大きく上回った。PTSDが疑われる高齢者が2~3割いるのは深刻といえる」と話した。

沖縄戦によるトラウマに関する調査



PTSDのリスクが高い人を診断する指標は、国内外で広く使用されている「改訂出来事インパクト尺度」(IES-R)を使い、トラウマの程度を数値化(0~88点)。PTSDの可能性が高いのは25点以上で、有効回答のうち141人(39.3%)にのぼった。平均点は22.4点で、最も高かったのは92歳の高齢者で72点だった。
阪神・淡路大震災から5年後の同じ指標を用いた調査(68人)では、平均点数が15.6点で、25点以上のPTSDのリスクが高い人は22%(15人)だった。同震災でPTSDと診断された人の点数は平均35点で、今回の沖縄戦体験者の調査では95人(26.5%)が該当した。
當山代表は「戦後67年以上経過しているにもかかわらず、阪神淡路の平均点を大きく上回った。PTSDが疑われる高齢者が2~3割いるのは深刻といえる」と話した。
リスクが高い人と、そうでない人を比べると、沖縄戦を思い出す頻度と相關関係があり、高い人では「常に思い出す」「時々思い出す」を合わせると87%、そうでない人の74%より高かった。思い出すきっかけは、「基地や軍用機を見たり、騒音を聞いたとき」「雷や花火の音や光」に有意な関係性が見られた。
また、沖縄戦で身内を亡くすなどのつらい体験をしている人は、PTSDリスクが高い人で78%が「(死亡者が)あり」と答え、そうでない人で「あり」と答えた人の66%を上回った。

高齢者の戦終わらず

PTSD不眠・いら立ち

沖縄戦体験者の精神保健についての調査では、悲惨な体験が心の傷として深く刻まれていることが分かった。トラウマが強い人は、不眠や不快な気持ち、いら立ち、神経過敏などの症状を訴える。身内を亡くした戦争の記憶に加え、日常生活と隣り合わせの米軍基地も、傷が癒えない要因となっている。

(1面参照)

たどる つなぐ

戦後68年

心的外傷後ストレス障害(PTSD)の可能性が高い人は、そうでない人に比べ、危険な目に遭うのを目撃した人の割合が高かった。PTSDの可能性が高い人の58%が「目撃した」と答え、そうでない人で目撃したのは37%だった。

PTSDが疑われる80代の女性(糸満市)は、沖縄戦時、戦闘のさなか南部をさまよひ、たくさん人が殺されていくのを見た。田畑は死んだ人だらけで、死体をまたいで逃げた。食べ物、飲み物はなく、人の血が混じった水を飲まざるを得なかった。収容先では食糧はあったが、死臭がして食べられず栄養失調になった。

女性は当時のことを思い出すと、つらい気持ちが再び返り、寝付きも悪くなり、

時々睡眠剤も服用している。調査で女性は「体験は乗り越えられない。今でも当時の場所には行きたくない」と答えた。

身内が亡くなった人や基地や軍用機を見て沖縄戦を思い出す人も、統計学的にPTSDリスクの高さと関係があった。

トラウマの程度を測る指標の点数が平均の2倍以上高かった豊野済市の80代の女性は当時、避難先のやんばるで叔父が爆風でやられたり、老夫婦が殺されるのを目撃し、爆風で壊

れた家で生き埋めになり、1週間意識不明になった経験がある。

沖縄戦をよく思い出すようになったのは、昨年10月

にホスプレイが配備されてから。軍用機を見るといららして怒りっぽくなり、低空飛行のときには「頭の中で帰れ、帰れ」という。神経が過敏になり、ちよつとしたことできことする。警戒感も強まって「何かあればいつでも逃げられるよう準備している」と話した。

戦争体験意識したケアを

調査した當山富士子代表

沖縄戦による心の影響について調査した沖縄戦トラウマ研究会の當山富士子代表に、調査結果や求められる対応について聞いた。



沖縄戦PTSDの調査について語る當山富士子さん(那覇市の沖縄タイムズ社)

「体験者の4割にPTSDの可能性がある。」

「戦後67年の時間の経過を考えると4割というのは、『まさか』と驚いたぐらい高い。むごたらしい地上戦で深刻なトラウマを抱え、その後も米軍基地問題にさらされ続けたことも影響し、傷が癒えなかった。高齢者にとっては沖縄戦はまだ終わっていない」

「心の健康状態は比較的

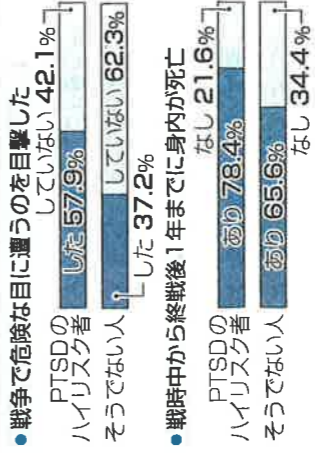
良好だった。

「通常の精神の健康状態を測る指標では他県の調査と比べても高い。だが、PTSD症状の程度を測ると高く、そのギャップが驚きだ。一見、いきいきとしているように見えても、消えぬようなトラウマを抱えながら生活している。今後、高齢化が進み心の健康が悪化すると、PTSDを発症する可能性もあり懸念している」

「調査を感じたことは、

「聞き取りを中断しようと思っただぐらい苦しむような人や、今後発病しないか不

調査にあたった沖縄戦トラウマ研究会のメンバー



ことば 心的外傷後ストレス障害(PTSD)

戦争や災害、事件、事故などで心に大きな衝撃を受けたことが引き金になって起こる精神疾患。体験が記憶の中で再現され、不安や落ち着かない、抑うつ、いら立ちやすい、眠りにくくなるなどの症状が出る。症状は自然に回復することもあがるが、慢性化すると仕事や日常生活に影響が出る。

で、精神科医の蟻塚亮(さん66)「仙台市」は高齢になつて現れる心身の不調を「晩年性PTSD」と呼ぶ。沖縄戦の心の傷は放置され、傷口は開いたままで、戦後も米兵による事件・事故、軍用機の飛行などによって傷のかさぶたは何度もはがされ、傷口が開かれるという。「戦争と米軍基地の存在が、高齢者のトラウマ記憶の増大や不眠などの症状を生んでいる」と指摘した。

安になる人もいた。基地問題の報道で戦争を思い出す人も多く、過重な基地負担が高齢者を苦しめているという。罪のない人をいつまでもいじめるのかと怒りも感じた」

「求められる対応は、

「沖縄戦のトラウマについて国や県は早急に全数調査をして実態を把握する必要がある。医療や福祉の関係者は、心身の不調を訴える高齢者に対応するときに、沖縄戦が背景にないか意識してケアにあたる」ことが大事だ。戦争体験について話して記憶を消化していくことは重要で、集まる場の確保、孤立しないよう支援することも求められる」